

勝つまで諦めない!

山下律子

<大浦湾の埋め立て>

大浦湾の埋め立てには海底に広がっている軟弱地盤の地盤改良が必要となり、政府は県に対し辺野古新基地建設工事の設計変更を申請していた。しかし、沖縄県のデニー知事はずっと不承認を貫いてきた。それは、「沖縄にこれ以上基地は要らない。新基地建設反対!」が沖縄県民の民意だからだ。沖縄は、日本の独立と引き換えに戦後米軍の統治下におかれた。27年後に日本に復帰した後も、米軍基地はそのまま残された。そのため県民は、米軍機による爆音、悪臭、落下物による事故、米軍人・軍属による性犯罪、強盗、殺人、米軍基地からの汚染水による飲料水の PFAS 汚染等々、基地被害に喘いできた。島を食い尽くした激しい沖縄戦の経験から「基地のある所は真っ先に狙われる、沖縄を二度と戦場にしてはならない」との思いも強い。2019年の埋め立ての是非を問う県民投票でも、反対票が72.15%と、県民の「新基地建設反対」の意思が明らかにされている。にも拘らず、昨年12月28日、政府は沖縄県民の声に耳を傾けることなく、代執行により設計変更を承認し、1月10日、大浦湾の埋め立て工事に着手した。

1月半ば過ぎ、私は3週間ぶりに訪沖した。那覇の家に着きテレビをつけると、パワーショベルのアームが海に向かって首を振り、バケツいっぱい石材を海に投入した瞬間が映し出された。思わず「えーっ、止めて!」と叫んでしまった。映像を見て叫んだ私の声は現場に届きようもなく、部屋の中で空しく響いた。1月10日から埋め立てを始めたということは、既に大浦湾には幾何かの石材が投入されてしまったことだろう。押し潰され氣息奄々の生き物たちを想像し胸が締め付けられる。直接押し潰されなくても、生態系が壊され、千年以上かけて成長した山のようにそびえ

るアオサンゴ群落も、種々の小型サンゴも、藻場を無くしたジュゴンも、その他大浦湾の多くの生き物たちがこの埋め立てにより、やがて死滅してしまうことだろう。生物多様性の宝庫として知られる貴重な自然環境の破壊をこのままみすみすと許してはならない。何とか止めなければ!との思いを強くする。

<辺野古新基地建設>

「普天間飛行場の一日も早い危険性の除去」は、辺野古基地建設を強行する政府の枕詞だが、辺野古沖での移設事業に着手してから既に20年(現在のV字型滑走路工事に着手してからは10年)も経っている。しかも1月10日に着手した軟弱地盤の改良は難工事で、計画通りに進んだとしても使用可能な飛行場にするまでに、これから12年かかるという。こんなに長い年月を要するのに、よくもぬけぬけと「普天間飛行場の一日も早い危険性除去のため」と言えるものだ、とあきれられる。しかも辺野古新基地完成後も、米軍は普天間を使い続ける可能性が高い。普天間の方が辺野古より滑走路が長く使い勝手がいいからだ。数年前の国会答弁で稲田防衛相がこのことを認めていた。「危険性の除去」は辺野古新基地建設のための方にすぎない。

政府は「辺野古が唯一」と基地建設を強行しているが、本当に完成するかどうかは危ぶまれる。大浦湾の水深は70~90mあり、海底に広がるマヨネーズ状の軟弱地盤の地盤改良は容易ではないからだ。政府は約7万本の砂杭を打って地盤改良する計画だが、国内の作業船では水深70mまでしか工事ができず、水深90mの地盤改良は非常に困難だと思われる。しかも地盤改良ができる作業船は国内に一隻しかないそうである。埋め立てに必要な大量の土砂の調達先も決まっていないし、辺野古の新基地は12年経っても完成しない、いずれ破綻するだろうと思われる。

このような完成の見通しが立たない工事に、政府は際限なく税金を注ぎ込んでいる。総事業費は防衛省の見積もりで、なんと9300億円。一昨年までに既に半分近くを支出していることを考えると、到底これだけでは収まらないだろう。(沖縄県では約2兆5500億円かかると試算している。)私たちの血税がこんな所で、こんなに無駄遣いされていることを見過ごすわけにはいかない。

<無力な司法と地方自治の大問題>

政府は、代執行により設計変更を承認した。そればかりでなく、大浦湾側の護岸工事の実設計や環境





保全対策等の協議の約束を反故にし、工事に着手した。さらに、司法を抱き込み内容にも触れず、沖縄県の上告を退けた。辺野古新基地建設に関して沖縄県は、故翁長県政以降 14 件ほど国と裁判闘争をしてきたが、沖縄県は一度も勝ったことがない。法の番人であるはずの裁判官は国の番犬となって、いつも国の言いなりの判決を下し続け沖縄県に襲い掛かっている。こんな不条理はない！

これまでの経緯からして代執行訴訟の高裁判決も予測された結果ではあったが、これは沖縄県だけの問題ではではなく、地方自治の根幹を揺るがす問題だ。「地域のことは住民自らが責任をもって決定する」「地方自治体は住民の信託に応えるため自らの責任をもって事務処理すること」という地方自治の概念に照らし合わせてみれば明らかだ。デニー知事は、辺野古新基地建設反対の民意を背負って不承認を貫いてきた。それなのに、国は沖縄県知事の権限を取り上げて代執行をしたのだ。国に抗う県を、無理やり国に従わせるということは地方自治への侵害であり、これが前例となり地方自治を崩壊させる道に突き進むことが危惧される。もっと大騒ぎしなければならない、全国で考えていかなければならない大問題だと思う。



<うるま・ミサイル配備>

「固き土を破りて、県民の怒りに燃ゆる島～」中城湾港第 4 ゲート前に、抗議に集まった人々の歌声が

響いた。防衛省・自衛隊が地対艦ミサイル部隊配備のための関係車両、装備品、弾薬等を、3 月 10 日に中城湾港から勝連分屯地に搬入予定とのが分かり、『ミサイル配備から命を守るうるま市民の会』から抗議行動の呼びかけがあった。それに応え私も参加。午前 7 時の集合時間に合わせ、車にて午前 6 時 20 分に那覇県庁前を出発。7 時少し過ぎに到着すると、既に大勢の人が座り込んでいた。マイクを使って大声で「道を開けて下さい」と繰り返す自衛隊員に対し、私たちは『うるま市全域が発射基地になるミサイル NO』のプラカードを掲げ「ミサイル配備を止める!」と声を上げ、「沖縄を返せ」や「一坪たりとも渡すまい」等の歌を歌った。しばらくすると、自衛隊車両が別の出口から公道に出たとの情報が入り、私たちも急ぎそれぞれの車に乗って勝連分屯地まで移動。すぐさま腕を組んで座り込んだが、機動隊がやってきて全員排除されてしまった。政府は、勝連分屯地に地対艦ミサイルを配備し、奄美、宮古、石垣の地対艦ミサイル部隊の統括拠点化を目論んでいる。この日の抗議行動では分屯地への車両の進入を 1 時間阻止することができたただけだったが、戦争への道を止めるために抗議の意思を示し続けることが重要なことだと痛感する。



<くけって諦めない>

不当判決により大浦湾の埋め立て工事が始まり、島のあちこちで軍事要塞化が進められているが、沖縄県民は諦めてはいない。抗議の声を上げ続けている。県外に住む私たちには沖縄の状況がなかなか伝わってこないが、耳を澄まして、目を凝らして情報をキャッチし、政府の沖縄に対する暴力を伝え合いたい。そして、政府の対応を許さず、県外でも諦めずに『ストップ! 辺野古新基地建設』の大きな声を上げていきたい。

(2024.3 記)